九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

【資料】学園紛争の中に立って

奥田，八二

https://doi.org/10.15017/4774150

出版情報：奥田八二日記研究会会報. 8, pp.345-353, 2022-03-31. 奥田八二日記研究会(九州大学大学文書館内)
バージョン：
権利関係：

【資　料】

学園紛争の中に立って

奥田　八二

大学の解体、変革は内部のゲバによって、内部矛盾の露呈によっては成就しないであろう。大学は一つの制度であるから制度の変革は制度の変革らしい運動によることなしには成就しない。

1

大学が荒れている．モチーフは 70 年安保反対と当面の大学法案粉砕である．私が勤めている九州大学では新学期が始まって 2 カ月足らず，5 月 20 日すぎには，ほとんど全学部で 7000 人以上の学生が大学立法反対を叫んで無期限ストライキに突入した．九大では昨年 1 月以来エンタープライズ空母の佐世保入港阻止闘争やジェット機の構内墜落問題処理をめぐる学生運動の昂揚はあったが，こんどのように授業その他の大学の日常業務が長期にわたってストップしたのは始めてである．いま国会では大学法案の審議が国民的関心の最高潮にある．この法案が 8 月はじめまで予定されている延長国会でどうなるか，強行採決で通過するか廃案になるか，私には予見しかねる．だが，法案の行先がどうあろうと，いわゆる大学紛争は当分のあいだ退潮しそうには思えない．いま高まりつつある全国的な大学紛争の波は向う 1 年以上のあいだ衰えることなく高まってゆくであろう．もちろん学生運動には学生運動の特殊な領域があるけれども，その特殊な領域が一般市民や労働者の問題と同じ基盤に立ち，一般市民や労働者の運動と歩調を共にする可能性は十分にある．それゆえ，ここ当分は学生運動をふくむ社会運動全体が高揚するように思われる．70 年問題とか 70 年運動といわれる背景があるからである．そこでは学生運動のみならず，労働組合運動，社会主義運動，青年運動，婦人運動など，各方面からみた社会運動が，それなりに高まりながら，深刻な自己変革をせまられ，次の 10 年を背負う新しい運動の形が芽ばえざるをえないであろう．

ところで現に学生運動が高まっていくについては，安保反対や基地その他の軍事活動反対という一般的な意味での平和運動が青年学生層に共感を与えているという理由はしばらくおき，ここではむしろ大学という社会がもっている特殊な条件を考慮せざるをえない．

大学紛争は安保反対（平和運動）と決して直接的に関係してはいない．エンタープライズ入港をめぐる九大問題，米軍ジェット機墜落問題は安保と直接関係しているが，その限りで

これら 2 つの問題は学園紛争の中には数えられていない．だが逆に，大学紛争のうちで安保反対（平和運動）とかかわりあいがないものはないといってもよい．大学紛争は，数年前は授業料値上げ反対や，管理者の汚職糾弾など消極的なものであったが，昨今では，学長排斥，医学部改革，生協承認，生協・寮などの学生負拒撤廃，学生会館・寮の自主管理（管理規則撤廃・無視，管理人追放），経理公開，学生参加，処分反対，スト権承認など，数えきれないほど多くの積極的，攻撃的なものに変わってきている．問題対象が大学の制度，資本主義の体制にかかわる大学の制度であり，運動の性質は平和運動というよりは，体制への挑戦となっている．

しかもその方法としては，大衆団交，軟禁，人民裁判，占拠，封鎖など，物理的暴力の行使がエスカレートし，器物破壊，建造物破損・汚損（はり紙，らくがきなど），備品消耗品窃取，私物窃盗が日常の行事となっている．もちろん，規則も秩序も儀礼も何もあったものではない．ヘルメットと樫棒と竹槍でもって教授だろうが職員だろうが一般の学生だろうが，こうした行動に立ち向かう者は追っかけられ危害を加えられる．「命は保障しない」というスゴ味もきかされる．

その意味で，大学は全国的に今や多くは無法地帯であり，そのような暴力が君臨している世界である．

やり方や言葉づかいは粗暴であり野蛮であって，ゴロツキと少しも変わるところはないが，ただ一点ちがうのは，そうした学生たちは正義感にもえ理性的に問題を考えているということである．愛情の一片も示しうる余地はないが，取りえといえば，その正義感と理性である．学生大会の多数支持をとりつけようとの努力はする．そして多数の支持をえれば多数によるということを得意顔して主張するが，少数派でしかないことがはっきりすると，それは形式民主主義で誤りだの，数の暴力反対だの，多数が間違っているなら少数でも正しいことは断固やるのだという．流派を異にするものの意見を決して取り入れようとしない．そうした意味ではこの種の学生のすることはファシズムではないかという人もあるが，ファシズムではありえない。

現在の学園紛争，学生運動は 70 年問題にふさわしい何か独特のものがあるように思える．

2

現在の学生運動は以上のような形相をもつものであるが，それは一般の市民や労働者にはまねできない大学という特殊な環境条件のなかで起こっているものである．ではその特殊な条件とは何であろうか．

さきに問題が消極的紛争から積極的紛争に転化してきたこと，学生の行動に暴力と無秩序な性格があるということを指摘したが，そこに大学の特殊な条件が何であるかの鍵があ

る．

学生の要求は，消極的であれ積極的であれ，ほとんどは理にかなったものである．たとえば寮を建てよという要求など誰の目にも明らかに学生の言い分が通っている．昭和 30 年代のはじめ九大では 300 名ばかりの女子学生に対して 28 名収容力ある寮があったが，十数年後には女子学生数は 1000 名近くに膨張しているのに，相かわらず 28 名の寮しかない．男子学生寮にしても 30 年代はじめ 5000 名の学生に対し 700 名分の寮があったが，十数年後の今日 1 万名の学生に対し 740 名分の寮しかない．学問，教育，研究とりわけ自然科学・技術の分野における発達はこの間に日進月歩し，大学はこのような社会経済の発展からくる要請に対し，辛うじて建物や設備，学生増募でもって対応したが，そこにひしめく人間について全くといっていいほど対応を改めなかった．これは，一般の世間で生産量や生産性の向上には力は注ぐが，それに反して労働災害や公害が激発して人間無視の生産・行政が横行しているのと全く同断である．

寮建設に関する学生からの要求が教授会や評議会につきつけられてはじめて大学当局は寮問題の深刻さを知る．それまでは知らぬ顔である．問題を知ったら予算がないと返事する．さらにつつかれると政府・文部省に強く要求しようということで責任を逃れようとする．腹の底には，学生の寮どころか，研究室や実験室，研究スタッフや研究費が足りないのにどうして寮の方まで手がまわろうか，という考えがある。つまり，1 人 1 人の教授の頭の中が，人間無視の研究欲によって充満しているのである．政府，文部省の態度はともあれ，大学自治の看板のもとで，1 人 1 人の教授の頭の中に研究室は寮に優先するという考えがある限り，そして研究費が常に不足している限り，寮が 10 年待っても建たないのは当然である．同じ論法で，食堂も休憩所や控室も建設されない．図書館もである．雨が降ったり休講になったりすると学生の居場所がない．町に出てパチンコでもするほかはないかのようである．昼食時には食堂の前に列を作り，50 分の休み時間中にやっとその列が解消する．学生にとって昼食時間もまた列つくりの競争時間となる．ほんとうは，一括して割り当てられた大学予算の中で，毎年その何%とかを学生教職員の学園研究生活のための福利厚生費に充当するという態度を大学当局自身が大学自治の範囲内で堅持しておればこのような深刻な事態にならなくてもすんでいたであろう．

政府・文部省は大学の予算はすべて教育研究費なので，福利厚生のためのカネはないという．あえてそれに使いたいのであれば，研究費の中から割愛すべきではないかというようなあいさつである．あるいは，大学からの要求項目の中で寮や食堂の建設要求が重視されていないではないかと，大学側の熱意のなさを強調する．この限りで政府・文部省の主張は当をえている．他面，政府・文部省は，寮は政治運動の拠点になるではないか．食堂は大学生協が経営し，生協の中に左翼学生の温床があるではないか，それゆえ，寮や生協はつぶした方がよいのだ，というふうに福利厚生施設を〝政治〟の観点からとらえて処理しようとする．国民の税金を使って，何のために住いや食事という私生活の面倒まで見なければならない

のかとうそぶいている．このように福利厚生というものが，学生教職員の教育研究と無関係であっていいと考えているところに官僚の政治的偏向と腐敗性がある．この点は徹底的に暴露しなければならないところである．つまり一般の事業所であれば福利厚生は事業の能率増進の面から不可欠な限度において必要とされる．教育研究の能率増進を物的な面からのみ，形の上からのみ考えている官僚には寮や生協は政治運動に利用されるだけで百害あって一利なしとみえるのである．しかしながら，人間が集団をなして生産的文化的な活動をするところでは福利厚生施設が政治を抜きにして必要だということを知るべきである．だから政治的利用は別の問題なのである．

こういうふうだから，寮の建設問題が〝大衆団交〟の論題として提起されると，蟻の大軍に攻め立てられるイモムシのように，大学当局はダウンして最後には学生側の主張の軍門に降る．教授たちの言い分は次々と矛盾を露呈し，論理の破綻が暴露され，確認書にサインすることになる．もちろんこのような寮や食堂の問題は学生側に言い分のあるいちじるしい例である．しかし，その他の問題についても，多かれ少なかれ，学生側のいい分の方が筋が通っている．いうなれば，大学側がかくもたやすく論理矛盾を暴露されるほどに，現実の大学の内部は制度的に矛盾だらけなのである．

なぜか．大学は現実の支配体制のなかの一つの環である．国立だろうと公立だろうと私立だろうと程度の差こそあれ，大学は現在の社会の支配的な動向に左右されながら存立している．永年の歴史のなかでそれが大学の内部ににじみこんでいる．社会が大学に要求する程度に応じて大学は動かされている．大学の中にいる教授たちも，いかに大学に自治があるとはいえ，この社会の要求に対して無批判的に，あるいは批判精神はあってもやむをえず，それに動かされてきたのである．中教審は「開かれた大学へ」ということを主張しているが，それは大学が門を閉さずにもっと政治的要求にこたえて支配者に奉仕せよという意味であるが，これ以上政治勢力に門を開いたら大変なのである．

積弊という言葉があるが，それは今日の大学の体制にあてはまる．誰もがあまり気づかないか，気づいていても長いものに巻かれていた方が住みやすい堕性，従来はそういう空気の中に学生も教授もなじんでしまっていたのである．学生たちが今その点に気づいて警鐘を乱打しはじめたということは歴史的に意味あることである．

学生たちは，大学の積弊について，あるいは社会の矛盾について教授に覚醒をうながして激しい行動をしている．いくら言ってもわかろうとしない教授もいる．学生たちはこのような教授に「専門白痴」という罵言をあびせる．専門分野についての知識や技術にいかにすぐれていても，その社会的な意味づけについては白痴に近いではないかということである．たとえば自分が研究しているテーマがいかに真理の探求に値しようとも，社会的な背景において大量殺りくの軍事研究の一環であることに気づかず，研究すること自体が社会的犯罪であることを知らぬなら，それが専門白痴である．

九大の構内に建設中の大型電算機センターに米軍ジェット機が墜落し，現在なお反対派

学生の妨害のために電算センターの建設ができないでいる．これは西日本地域の科学者が研究上一刻も早く再建をしなくてはならぬものとして解決が待たれている．しかし現段階では恐らく見とおしはなく，電算機は断念するほかない情勢にある．反対派学生たちは，科学者たちの研究上の死命を制するほどの転機に立つこの問題についても，その研究が軍事目的に使われない保障がない限り，電算センターの建設の必要性を認めるわけにはいかないと，実に冷やかな態度で実力阻止を叫んでいる．この論法を押していけば，今日の既成の学問それ自体がほとんどその存続の必要性が認められなくなり，現存大学の教育も研究も解体消滅させられなければならないということになる．学生たちはその意味で大学解体を叫んでいるのである．

ちなみに，反対派学生たちは，ノンポリ的同僚が卒業することをも阻止せよと叫んでいる．卒業して就職することは，資本家に労働力を売り，資本に搾取を許すことになるからだという．同様に，一般の労働者も資本家に労働力を売って利潤をあげさせることも拒否せよという．では，君たちは何のために大学にいるのかと聞くと，大学を解体させるためには大学にいなければならぬではないかという．教授たちにも，早く辞職せよというわけである．

3

このような論法のどこかに狂いがあることは誰にもわかるはずである．かれらは〝否定〟を強調するそれはわかるが，それは単純な破壊の否定でしかない．しかし，一度，かれらの論法に乗る限り脱出できなくなって論破されてしまう者が多い。教授たちは矛盾の多い現体制のなかで（その範囲内で）〝真理〟を追求し，そのことの必要上〝大学の自治〟を許され，それを守ろうとする．学生たちにとってはそのような枠をはめられた真理や自治はナンセンスであり，それ自体撃破すべき矛盾なのである．教授たちは純心に真理を愛する．しかしそれが体制内真理でしかないことを多くは気づいていない．だから一定の論理に導かれて，あるいは学生たちにつつかれて政治という無知の世界における真理を追求してゆくと，いつのまにか知らぬ間に，体制の外に出ざるをえなくなっている．気がついたときは，論理の上で体制の中にもどることができなくなっているのに身は現に体制の中にいるしかないということになる．教授は学生に攻撃され，自分自身が矛盾に満ちた体制の鏡であることを知らされるが，どうにもならない．実行できもしない確認書に理くつではなるほどそうだといってサインする．後になって現に実行できないから学生は，教授がこうもウソツキであったかと怒るのである．

こうしたことを積み重ねてゆくと屠場に行く牛のように，教授はできるだけ学生の前に出まいとするようになる．学生たちは自分の理くつの正しさを教授にぶつけることによってのみ実証することができるのであるから（警官にぶつけてもダメ），どうしても教授を自分たちの前に引き出そうとして必死になる．〝大衆団交〟は，この意味で学生たちの渇望

の，ご満悦の場であり，教授にとっては屈辱と破産の場である．

だが，大学以外の世界では，ここからがちがってくる．今日の社会では大衆のもつ論理は一定以上通用してはならない．それ以上通用すれば支配の秩序が破壊される．県庁でも郵便局でも駅でも炭鉱でも工場でも，大衆の前に最後にあらわれるのは警官隊である．警官隊は，大衆の理論がそれ以上通用しないように，支配の秩序がそれによって破壊されないように作用する国家の暴力装置である．警察力は真理や論理を中絶させる暴力である．大学が，真理を主張する場である限り，学生大衆の前に国家暴力をもちこむことはなし難い。警察力はこの場合真理の敵だからである．県庁や郵便局や駅は，真理探求の場ではない．大衆収奪と大衆支配を，大衆の需要を手段としながら貫徹するところである．そこで働く労働者が知事や郵便局長や駅長に対してどこまでも真理の命ずるところにしたがって事態を追及すると，最後は警官が出てきてこれをさえぎる．大学とのちがいは，大学が真理探求を業としている点にあるが，他面，大学もまた矛盾多き体制側の一機関だという観点に立ちかえったとき，ここでもやはり最終的には学生大衆に対して警官隊が立ち向かってくることになる．警官隊が入ってくると大学はその半面である真理の府であることをやめることになる．大学は形ばかりのものとなり，一定以上の真理の追求にフタをすることになる．教授たちは以前にもまして，支配の秩序の中での限られた真理の府であることにがまんするほかなくなる．そのような限界づけられた真理がほんとうの意味での真理でないことはいうまでもないから，そのような大学はイヤだという教授もでてくるし，あくまでも警官の導入によって学生の追及をかわすようなことのないように努力している教授もいる。

4

今日の大学は，学生の追及のもとで，結局は警官を導入しないではなり立たないし，さらばといって警官の導入をしてもなり立たない．体制の秩序と真理との矛盾が一体になっているのが今日の大学の姿なのである．退くことも進むこともできないのが大学である．外からみたとき，大学当局は何をしているのか，何もできなければ大学立法でやることはやむをえぬではないかという意見が相当多いようである．だが，今回の大学立法で治療できると考えているような種類の治療なら，そのような立法はなくてもできるのである．警官を入れて〝暴力学生〟を排除し，その後の〝暴力〟にそなえて必要な数だけ警官を常駐させればよいのである．そうでないなら，腐敗物に集まるハエのように，〝暴力学生〟は追っても追ってもまた必ず集まってくる．

政府は理想的なモデル大学をいくつか作ってみるといっている．バカげたことだと思う．何千億円もの国費を投じて数個のモデル大学を作る費用があるなら，既存の大学をモデルに指定して政府が思ったように改良すればよい．政府は思ったように改良できそうにないから別にモデル大学を作る気になるのであろう．その時，政府は既存の大学がなぜ思ったよ

うに改造できないかの理由を静かに反省してみるとよい．すなわち，元来，大学というものは政府の思ったようには動かないものなのである．政府の思ったように動くのであれば，それはもはや大学ではないのである．だのに政府の思ったように創造できるモデル大学なるものができたと仮定してみよ．それはもはや大学ではなくなるであろう．モデル大学など作らなくても，政府の思ったようになる大学はすでにある．昔の陸海軍大学校，今の防衛大学校がそれである．そのような政府の思うようになる大学は，昔も今も大学とはいわないで大学校といっているのである．政府のモデル大学なるものは，このように，大学校であるか空想の産物でしかないのである．

今の段階では大学なら，どこでも〝暴力学生〟が発生し騒ぎ立てる．これが今日の大学のおかれた位置であり宿命である．大衆が基本的には合理化に反対し安保に反対せねばならぬような社会においては当然にも受けとらねばならぬ大学の宿命である．

なぜ学生が真理を追求するのに〝ゲバ棒〟を用いるのだろうか．学生たちは学内でゲバ棒を用いる理由に，1 つは護身用だという．ヘルメットも覆面も同様である．しかし，攻撃する者のみが必要となる護身用具である．盗賊がそうするように．

もう 1 つの理由としては，欺瞞にみちた教授たちの体制と真理の合体のバケの皮をはがす道具としてゲバ棒が用いられるようである．それは学生仲間の同僚に対しても用いられる．かれらにとっては，かれらの考えたことが正しいのであって，それに反対するものはすべて正しくないのである．多数決原理は民主主義の 1 つの方法であるが，かれらは時にはこれを用い，時にはこれを棄てる．多数の学生がかれらに同調するときは，学生の多数の信頼の上にこのような行動をとっているのだといい，かれらの行動が多数の学生によって否定されたとき，多数者は誤りをおかしている．少数が正しいと主張する．このようなとき少数の正しさを通すために仲間に向かってゲバ棒を振う。

5

教授は国家権力の一部であり，支配者であるから，被支配者はその権力に対抗するためにゲバ棒を用いるという．ヤクザの世界でもそれほどでないだろうと思われるような汚い言葉を教授にあびせる．暴力と同じ作用を言葉に果させるのである．ゲバ棒が教授の身体のまわりにめくらめっぽうに振りまわされるというのではない．一撃のおどしをするためである．団体交渉の席でゲバ棒を下においているときは，ゲバ学生たちはヘルメットで机をたたいたり，どなったり，汚い口をきくだけではない．紙のつぶてを飛ばすし，万年筆の先や鉛筆の先を教授の目の前につき出し，目の玉をえぐる直前まで行動する．ガラスを破る．一枚数万円のガラスでも一撃で破る．鉄の扉でもへこませる．金庫もこじあける．屋根をはぐ．研究室の書籍は持ち出して売りとばす．机のひき出しをさぐって目ぼしいものは盗む．――ブルジョア的思想を粉砕し，ブルジョア的財産を破壊するのだというのである．ブルジョア

的富を革命に役立たせるのだともいうのである．――全くの狼藉というほかはない．

大学はこのような乱暴に対してなすべき有効な処置を知らない．警官を呼ぶのでなければ，なるように，なすようにさせておくほかはない．どのような貪欲ものでも腹一ぱい食うと欲しくなくなる．そのように，〝暴力学生〟もしたいようにしたあとは，満腹した豚のようにたわいもない姿を見せる時点にくる．限度というものがあるのであろう．

かれらはまず否定する．しかし何かによって，すなわち歴史的必然，法則，理論的権威，組織的権威によってそうするのかというとそうではない．プロレタリア革命など疑問だともいう．もちろん平和革命など考えられない．スターリン主義は抹殺さるべきものである．社会主義政党など信用できない．党不在をなげくのではなく党の無用をすら主張する．ロシア革命はレーニンのボルシェビーキがやったというのはウソではないかという．歴史は書きかえらるべきだという．ロシアの大衆が革命に立ち上がったということのみが真実で，あとは作りごとだという．

封鎖と暴力の数々を働いていた某学生と数十分論争したあとで私は，5 年後にまた会おう，その頃にはどちらが正しいか見当がつくだろうといって別れた．かれは私に，社会主義の実現を望むならば，大学の教授を辞任し，革命にはせ参ずべきだといった．私は，各人には各人の道があるといった．同じ社会主義を目ざしていても，各人は今の各人の道を歩みながら同一の目的に到達することを考えてはいけないのか．かれは歴史の断絶を主張し，私は連続を主張した．すべての人が職を辞し革命にはせ参ずることができるかどうか．一せいに蜂起することができるのであれば，日常の運動も組織も不用である．その日常組織を指尊する党も不用である．かれはそういっている．果してそうだろうか．そうならば，社会の改造のために，日常組織や政党を通じて多大のエネルギーが浪費されていることになる．

ブルジョア的富，ブルジョア的道徳，礼儀，法律，秩序――それらは〝暴力学生〟にとっては即刻に粉砕され，革命的にのみ利用さるべきものであるという。歴史の遺産，文化財などもかれらの行動の必要の前にはその存在を主張しえなくなる．だが革命とはそのような断絶なのではない．

〝暴力学生〟は，2 つのものによって支えられている．1 つは自己の観念世界．もう 1 つは大学という特殊な世界．その他の一切の世界においては，かれらは通用しない．

すべてを疑い否定する者が論理だけで押しまくってくると，論理は誰の味方でもなく上手に使いこなした者にサービスするものであるから，理論ペン先を目の玉にさし込むようにつきつけて確認闘争とかいうのをやっていると，こちらが頭が変になってきて，どうでもいいという気分になる．あとは徹夜団交なら体力で勝負がきまるし，教授対学生集団なら口の汚なさと数で勝負がきまる．書にサインしろというと，それが通用する．教授対学生が 1 人対 1 人の場合ならどんな密室でもありえないようなことが，〝大衆団交〟という場ではおこるのである．このような観念世界の勝負を支えているのは結局は暴力なのである．だがそれはその範囲のみの通用である．

学生の暴力が通用するのは，いまのところ学園内部，しかも警官を入れない場合に限られる．警官が国家の暴力を意味することはいうまでもないが，この暴力に対しては学生の暴力も，現段階では，通用しそうにない．街頭はいうに及ばず学園内でも警官の力がある限り学生の抵抗はゲリラ以上にはでない．

学生たちがいうように大学の解体を叫ぶことはそんなに困難ではない．そして今日の大学は解体を叫ばれるにふさわしい矛盾をもっている．しかし，学生の暴力でもって大学が解体されうるかというとそうではない．学生の中には，警官を導入したら解体が促進されるから，警官が導入されざるをえないように〝暴力的な〟運動をやっているのだという者もいる．しかし，警官を導入したからといって，大学は解体されえない．最も大学らしからぬ大学にねじまげられるだけである．

大学は単なる構造物ではない．施設や備品がどれだけ破壊され略奪されようとも大学はつぶれない．また大学は単なる学生，教職員からなる社会集団でもない．学生や教職員のいない大学は考えられないが，申し合わせによって解散したり，規約によってどうにでも作りかえられるものでもない．大学は構造物であり社会集団であると同時に，むしろ今日の国家社会を構成する制度である．

大学の解体，変革は内部のゲバによって，内部矛盾の露呈によっては成就しないであろう．大学は 1 つの制度なのであるから，制度の変革は制度の変革らしい運動によることなしには成就しない．学生の暴力，大学立法のような国の暴力によっては，そうした嵐がすぎたあとで大学は，ゆがんだ大学に変形するだけでしかないであろう．

※『社会問題月報』1969 年 8 月号より転載。